



## 備えなければ安全なし

まつ ぼら よし ゆき<sup>†</sup>  
松 原 美 之

米国の同時多発テロを一つの契機として、「緊急事態対応」という言葉を聞く機会が一気に増大したように思われる。それとともに、安心・安全な社会の重要性を指摘する提言が増えた。安全工学会のメンバーにとっては、これまで長年にわたって主張してきた事柄の重要性が広く認識される時代となったという意味では、望ましい動向であるといえよう。しかし、マスコミなどで取り上げられる話題の多くのものが、実際に発生した安全を脅かす事態に対応するための事後対応の科学技術、テロや武力攻撃など作為による危険への対応のための科学技術に偏りすぎていることが気になってくる。災害を起ささないための科学技術の重要性が忘れられてはいないかという思いである。

2004年12月26日に発生した、スマトラ沖地震では死者行方不明者が20万人を超えるという大惨事となったが、この被害を減少させることができたとしたらそれは、津波警戒網の整備を含めた、事前の減災対策であったことをいま一度思い起こしていただきたい。災害を起ささない努力、未然に防ぐ努力の成果として、わが国は世界で最も安全で安心な社会を実現し「水と安全がタダであると考えている国民」が誕生した。しかし、その結果として、「いざという時のための備えをしない国民」になってしまっていたのではないか。

河川の改修、築堤、治水が十分でなかった時代は、そう遠い昔ではない。吉野川流域の「藍納屋上げ舟」（洪水への備えとして、濫時の救助・避難用の小舟を軒先に吊しておくもの）のような備えは、ほんの少し昔の日本の輪中地帯のたいていの家で見られた。洪水を予防できなかった時代には、それなりの「いざという時のための備え」が、日本国内、一般的に見られた。洪水を予防する努力の積み重ねが、洪水に襲われる頻度を激減させ、日常生活の安全を向上させ、その結果人々の意識の中から「いざという時のための備え」を消し去った例である。こうした例は、「台風への備え」、「故障への備え」、「停電への備え」等々、事故・災害の発生を未然に防止する努力が成果をあげた多くの領域で見られ、わが国の「脆弱性」の原因の一つとなっていることは否めない。

近年の大規模自然災害に直面し、あらためて、「いざという時のための備え」と「作為による災害を防止する対策」への注目が高まっているのは、安全が当然であったわが国で「いざという時のための備え」が、失われてきたからであり、その視点が重要であること、犯罪、テロからの安全を確保する科学技術、大規模自然災害発生時の救助・救援のための科学技術は、現在のわが国において重要であることは論を待たない。しかし、同時に、これまでのわが国の安全を支えていた、「災害を起ささない努力」、「未然に防ぐ努力」に関連する科学技術について、現在においても「備え」が十分であるかについても、あわせて検討することを忘れてはならない。

車を運転してきたばかりの人が、「途中、何個の赤信号がありましたか？」という質問には比較的簡単に正解をするが、「何個の青信号がありましたか？」という質問に正解できないという簡単な事例は、「順調にうまくいっている事柄の、暗黙の前提条件に、人は気づかない」という、人間の特性を示している。従来安全工学においては、「質の高い労働者・技術者」が「よく性質の理解されている物質」を「新しく維持状態の良い施設・設備」において取り扱うというような、いくつかの暗黙の前提条件のもとで、予防の技術が構築されているのではないかと、時代・社会の変遷の中でこうした暗黙の前提条件が変化してはいないか、現在構築されている安全工学の体系に、以前は青信号であったために、気づかれていない安全に関する重要な要因があるのではないかという研究が、今必要とされているのではないだろうか。

すなわち、安全な社会を科学技術的に構築し、「備え」を万全とするためには、これまでの安全工学がうまく成果をあげていた暗黙の条件・環境について分析し、現代の社会にふさわしい、災害を予防する科学技術の展開が望まれている。

「安全」は、重要だけれども日頃は気づかない「空気のような存在」である。「安全」を失ってから大騒ぎすることがないように、災害の未然防止の科学技術という「備え」を十分に進めようではないか。

† (独) 消防研究所：〒181-8633 東京都三鷹市中原3-14-1